

國學院大學學術情報リポジトリ

2020年度国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-16 キーワード (Ja): NDC8:302.1 キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001625

ラフカディオ・ハーンと〈見えざるもの〉の交渉をめぐって

小泉 凡

(小泉八雲記念館、島根県立大学短期大学部)

はじめに

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲 / 1850-1904）には、生涯を通して周囲に〈見えざるもの〉を語る人々の存在があった。ギリシャの母ローザやアイルランド時代の乳母キャサリンから、日本時代の小泉セツまで、つねにハーンはそんな女性たちの語りを通して〈見えざるもの〉を体内に取り入れ、新聞記事や、紀行文、再話文学という形で、英語で〈見えざるもの〉の文化を発信し続けた。幼い頃には、みずからも、〈見えざるもの〉と邂逅する恐怖を体験した。

ギリシャに生まれ、アイルランド・フランス・イギリス・アメリカ・マルティニーク・日本と、生涯で地球半周を超える旅をしたハーン。その人生や思考に〈見えざるもの〉はどのような影響を与えたのか。そしてハーンが発信した〈見えざるもの〉をめぐるメッセージは現代社会にどのような意味をもつのかを考えてみたい。



来日前のラフカディオ・ハーン(39歳)
提供 小泉家

1. 〈見えざるもの〉との交渉遍歴

ヨーロッパ時代



アイルランド時代のハーン
と大叔母サラ・ブレナン
提供 小泉家

ハーンにとって最初のふしぎ物語の語り部は最愛の人、ギリシャ人の母ローザだったと思われる。それは生誕地レフカダで「頭のでっぺんからつま先まで嬉しさでぞくぞくするようなお話」を聞かせてくれた人がいたことについて、母を想起させるニュアンスで表現しているからだ。『夏の日々の夢』『東の国から』(1895) もっと記憶がはっきりしてくるのはアイルランド時代のこと。イオニア諸島でもっとも南の島キシラに生まれ育ったローザは、アイルランド出身のチャールズ・ブッシュ・ハーンと恋に落ち、ラフカディオを伴ってダブリンに行くが、環境の変化から心身を病み、4歳のハーンをのこしてギリシャへ帰ってしまう。

孤独になったハーンは、しばしばお化けに襲われる夢魔の恐

怖を体験し、大叔母サラ・ブレナンに連れていかれる教会のゴシック建築にさえ恐怖を感じるようになる。こういった一連の神秘体験から、夢と超自然の文学との深い関係を気づかされていくのだった。『夢魔の感触』『ゴシックの恐怖』『影』1900』などの自伝的作品)

しばらくして、八雲のもとへアイルランド西部コナハト地方出身の乳母キャサリン・コステロがやってくる。アイルランド北西部のコナハト地方は、ケルトの口承文化がとりわけ豊かに育まれてきた地域だ。孤独だったハーンの至福の時は、キャサリンが異界の物語を話してくれる時だった。ハーンは晩年の1901年9月、「私には妖精譚や怪談を語ってくれるコナハト出身の乳母がいましたので、アイルランドの事物を愛しているはずだし、またじっさい愛しています」⁽¹⁾とアイルランドの国民的詩人で多くの妖精譚を採話したウィリアム・バトラー・イエイツにしたためている。ハーンは母を捨てた冷血な父、自分をアメリカへ追いやったアイルランドの親戚への恨みを忘れなかったが、ゴーストリーなアイルランドの文化環境には感謝と親しみの念を抱いていたことがわかる。

キャサリンに関するハーンの手記もヴァージニア大学図書館に保存されており、筆者は2017年9月に閲覧することができた。それによれば、長身の黒髪の女性でエメラルドグリーン瞳をもち、おもねることはなく正義感が強いと書かれている。残念ながら、ハーンに語られた物語の内容への言及はない。

しかし小泉家には、キャサリンが幼いハーンに語ったと思われる二つのアイルランド民話「三つの願い」と「二人の旅人」が口頭で伝わっている。ただ、たくさん話したと思われる妖精譚の中身については不明である。その意味で、キャサリンは、幼い水木しげるに異界の魅力を伝えた「のんのんばあ」こと、景山ふさに響き合う存在だったと言えよう。

その後ハーンは、北イングランドの寄宿制の神学校、聖カスバート校に通うが、ここでは僧侶である教師たちの偽善的な行動に不信感を抱き、いっそう非キリスト教的な文化に共感するようになっていく。また「キャット」(クリケットに似た球技)での遊戯中に、硬球の殴打による事故で左目を失明する。この体験も〈見えざるもの〉への関心を高め、五感を研ぎ澄ませて対象を観察する態度を身につける要因になったと考えられる。

アメリカ時代

大叔母の破産が直接の原因で、アメリカへ移民したハーンは、シンシナティで、霊的感受性の強いマティ(本名:アルシア・フォリー)という元奴隷だった混血女性と出会い、白人と有色人種の婚姻を禁じる州法を破って結婚する。そして彼女が体験談として語る、奴隷の怨霊が出没するケンタッキーの幽霊屋敷の物語などを再話し、新聞に発表するようになる。ハーンはマティについて、「読み書きを習ったことは一度もなかったが、語るに際しての素晴らしく豊かな描写力、普通以上に優れた記憶力、そして、イタリアの即興詩人をも魅了するであろう座談の才などに生来恵まれていた」⁽²⁾ことを記している。

1887年から10年間住んだニューオーリンズは、アフリカとフ



マティ(本名、アルシア・フォリー 1854-1913)
提供 小泉八雲記念館

ランスやスペイン、それに先住民の文化が接触・融合し、クレオール文化と呼ばれる混淆文化が花開いた町だ。ここでハーンは廃墟のような共同墓地を探訪し、ヴードゥー・クイーンと呼ばれたマリー・ラボーをはじめとする複数の話者から、俗信や亡霊たちが主役となる怪談を採集、発表する。この時代には、文献から中国の怪談を再話したり（『中国怪談集』1887）、世界の神話伝説を再話する（『異邦文学残葉』1884）など、再話文学作家としての活動も開始してゆく。

19世紀から20世紀初頭は、心靈主義が全盛期を迎える時代とも重なり、ブルワー・リットン、レ・ファニュ、ブラム・ストーカー、エドガー・アラン・ポーなどが活躍した時代だ。ハーンもその思潮の中に身を置き、とりわけポーを愛読し、フランスの作家テオフィル・ゴティエの怪奇小説の翻訳にも力を注ぐようになる。

さらに1887年からのべ2年間、同じくヴードゥーの文化に彩られるカリブ海のマルティニーク（フランス領）に滞在し、島に伝わる超自然的伝説を再話する。身近な世話をしてくれるシリアからは、ゾンビ信仰の諸相を探り、その成果をハーパーズ・マンスリー誌に投稿し、さらに『仏領西インドの二年間』（1890）として単行本にまとめる。

シリアについてハーンは、「妖術師とか、魔女、ゾンビの力で、私の身に何か起こりはしないかと、それを大いに心配している。シリアのゾンビに対する信仰は、議論の余地なんかないほど堅いものがある。この信仰は彼女の内性の一部であり、——ある意味では遺伝的なもの、人種的なものである」⁽³⁾と述べる。また、小説『ユーマ』の中で、マルティニークで語り部の役割を担っている黒人の乳母の存在が、子どもの空想力をアフリカナイズし、育んでいることを高く評価している。

日本時代

来日後、松江で出会い神戸時代の1896年に正式に結婚した小泉セツは、やはりすぐれた語り部だった。セツの実母チエは江戸時代の小説類を耽読する文学好き、また養家の稲垣トミも、狐に化かされた話など世間話やフォークロアの伝承者で、子ども時代のセツは親から物語を聴く時間に至福を感じていた。セツが「鳥取の布団」という兄弟の哀話を語った時、ハーンはセツに語り部としての才を見出したという。⁽⁴⁾『怪談』に代表される後年の再話文学作品の原話の大半がセツによって語られたものであることを考えると、セツはハーンの〈見えざるもの〉をテーマとする文学への最大の功労者であったと言える。

2. ハーンの妖怪体験・妖怪表現

ハーンは来日後に限っても100話ほどの怪談を紡いだ。怪談は、幽霊や妖怪など超自然的な存在や現象と関わる内容をもつ怖い話、不思議な話の総称と言えよう。換言すれば、「妖怪」は、多くの場合、「怪談」という「物語」を通して伝承されるということになる。妖怪という広い領域の分類法のひとつとして、「現象妖怪」「存在妖怪」「造形妖怪」という分類の仕方がある。（小松和彦『妖怪文化入門』）すなわち河童や天狗、山姥というような怪異をもたらす存在としての妖怪（存在妖怪）だけでなく、「怪音」「神隠し」のような不

思議な出来事（現象妖怪）や、化け物の絵巻や水木しげるによって描かれた漫画（造形妖怪）も「妖怪」というジャンルに入れて考える。試みにハーンが文筆やイラストでとりあげた妖怪たちをこの三者の分類にあてはめてみると、そのすべての領域に及んでいることがわかる。

幼い頃、ダブリンのアッパーリーソン通りの家で、冬場の逗留客であるジェーンという女性と夏場に遭遇し、彼女が振り返った顔はのっぺらぼうだった。さらに生身のジェーンが秋にやってきたものの、間もなく病死してしまうという恐怖体験。日本でも、松江時代の親友西田千太郎の死に際し、東京の街角で西田の幻影を見ている。1904年9月26日のハーンの死の直前に、愛でていた松虫の声音が途絶え、庭の桜が返り咲き、遠くへ旅した夢をみる。これら一連のハーン的神秘体験は「現象妖怪」に分類される。

晩年、セツと長男一雄は、ハーンの依頼を受けて、妖怪の狂歌とイラストが描かれた『狂歌百物語』（1853）を浅草の古書店で購入しハーンに提供した。この本にインスパイアされたハーンは、同書から14種の妖怪を選び、狂歌の英訳と解説をつけた「化けものの歌」（『天の川縁起』）というミニ妖怪事典を執筆することになるが、これは「存在妖怪」の発信といえる。

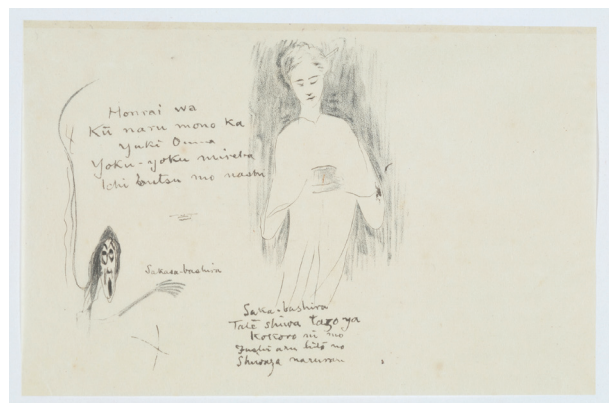
さらに、「化けものの歌」で取り上げたそれぞれの妖怪に自分がイメージするイラストを描いている。イラストは、没後発見され、作家・佐藤春夫のプロデュースで『小泉八雲秘稿画本妖魔詩話』として、ハーン没後30年にあたる1934年に小山書店から刊行された。これは「造形妖怪」と言える。

すなわち、ハーンは「現象妖怪」を体験し、怪談の再話など文筆を通して「存在妖怪」の発信を行い、半ば趣味を生かして「造形妖怪」の作成を行った。三者すべてに関わっていたことがわかる。

3. ハーンの再話怪談と伝承妖怪

『怪談』に代表される著作、すなわち主として文字に書かれた原話にもとづき、翻案した再話作品集は、晩年、新宿の富久町や西大久保の自宅で執筆された。妻セツが江戸時代から明治時代の怪談集・奇談集を入手し、ハーンの好みそうな話を語ることで再話作品は生まれていくが、意外にも作品にみえるモチーフは、ハーンが松江時代にすでに認識していたものも多い。モチーフとなる妖怪の伝承は、来日後第一作目の『知られぬ日本の面影』に散りばめられている。

たとえば、『怪談』の「雪女」を見てもよい。これは、文字に書かれた



ハーン画「雪女」（『小泉八雲秘稿画本妖魔詩話』より）

原典からの再話ではなく、小泉家に出入りしていた庭師宗八とお手伝いのお花が、奥多摩の檜原村辺りの樹木の霊と樵の交渉の物語を伝え、それをもとに雪女との異類婚姻の物語を創作したと推察される。⁽⁵⁾ ところで、存在妖怪としての「雪女」を知るのは、松江でのことだ。セツの養祖父、稲垣万右衛門が幼い頃、大雪の日に雪女に遭遇し、家へ逃げ帰った話（「幽霊と化け物」『知られぬ日本の面影』）を聞いて以来、この雪の精に心を奪われていたハーンだった。

『怪談』の「ろくろ首」は、雲水がそうとは知らずにろくろ首の家に泊り、夜中にろくろ首を退治する話だが、すでにフォークロアとしての「ろくろ首」は松江時代に知っていた。それは、出雲の人気髪結いコトに嫉妬した先輩の髪結いジンが、コトが前の亭主に捨てられたわけを、こんな噂を捏造して広めたというものだった。



ハーン画「ろくろ首」（『小泉八雲秘稿画本妖魔詩話』より）

ある晩のこと、亭主が夜中に目を覚ましてみると、若いコトの首が枕からスーッと起き上がり、胴体は寝たまま、首だけが大きな白蛇みたいに長く延びているところを見た。そこにあった行灯の油を舐め、やがてまた、枕のところまで戻ってきた。さらに、ある巡査が、夜遅く、胴体のない女の首がしきりと木の実をついばんでいるのを見た。巡査はとっさに抜け首と思い、サーベルで峯打ちを食わせたら、その首はコーモリが飛ぶように、素早くサッと縮んで逃

げたが、それがコトの顔だった。（「女の髪」『知られぬ日本の面影』）

東京時代には、愛蔵する『夜窓鬼談』や『狂歌百物語』にみえる「ろくろ首」の挿絵も、きっとハーンにインスピレーションを与え、『怪談』の「ろくろ首」に結実したのだろう。

市ヶ谷富久町に住んでいる時のこと、出入りの髪結いがこんな話を伝える。「力^{りき}」という知的障害をもつ男性が亡くなった時、母親は力の手のひらに『力ばか』と書き、今度生まれ変わってくる時は、幸せに生まれつくようにと祈った。3カ月後のこと、麴町にある立派なお屋敷で、左の手のひらに文字が書かれた男の子が生まれ、その文字は「力ばか」と読めた。お屋敷では力の母を探し、墓の土を少しもらい浮かび上がった字を消したということだ。（「力ばか」『怪談』）

ハーンがこのような「生まれ変わり」をテーマとする話に深い関心を示したのは、古代ギリシャ人やケルト人の循環的生命観への共感があったことも想像される。島根県的美保関から「輪廻の教義は—その来世におけるいくたびもの誕生の約束と、—冥土への旅立ちに関して恐怖を抱かぬことをもって、人生にどんなに美しい影響を与えていることでしょう」⁽⁶⁾とチェンバレン宛書簡に綴っている。

「生まれ変わり」というモチーフについても、セツから松江の持田地区に伝わる「こんな晩」の民話を八雲は聞かされていた。ある百姓が貧しさゆえに6人の子どもを川へ流し、月夜の晩に7人目の子を抱いて庭にいたとき、5か月になる赤子が「おれを川へ捨てたの

も今夜のような月夜だった」と前世を語るという話だ。（「日本海に沿って」『知られぬ日本の面影』）さらに、1892年に隠岐を旅行した際、中の島の菱浦で子どもの神葬祭に出会い、その際にこんな話を聞く。「祈りながら、母親はその小さな亡骸の手のひらに、死んだ愛児の名前の頭文字を書く。幾月か経って、彼女はふたたび母親になる。そのとき彼女は、生まれた赤子の花のように柔らかな手のひらを、急いで調べて見る。すると、見よ！赤子の柔らかな手のひらに、バラ色の痣が一死んだ子の手のひらに書いたのと同じ文字が、ありありと現れているのだ」。⁽⁷⁾ まさに「力ばか」に通じる俗信をハーンは隠岐というフィールドで聞いていたのだった。

来日早々の松江で、小泉セツや地域の人々から聴いた伝承怪談は、晩年、新宿で新たな原話をもとに再話文学へと昇華した。『怪談』に収められた作品のモチーフの多くは、八雲が松江時代から関心を示していたもので、そこには時空を超えた連続性がみられる。松江時代の怪談も東京時代の怪談も、伝承に基づいたものか、文字に書かれた原典に基づいたものかの違いはあるものの、どちらもセツの口を通して語られたという共通点がある。

また、再話に際しては、自分の体験を活かすこともあった。たとえば、「むじな」の最後のくだりに登場させた「大きな卵のようなのっぺらぼう」は、原話の『百物語』第33席では「顔が二尺もある化け物」である。ハーンの再話は、前述したアイルランド・ダブリンでの、のっぺらぼう・ジェーンの幻視体験を挿入したものと考えられている。

ハワイの怪談研究家の故グレン・グラント氏は、ハーンの「むじな」に親しんだ日系移民が、もともとのおっぺらぼうの伝承がないハワイで、ワイアレア・ドライブインの女子トイレにのっぺらぼうのウェイトレスが出没するという有名な都市伝説を創出したと言っている。⁽⁸⁾ 書承された物語が再び口承文芸へと変貌することは珍しくないが、「むじな」の場合、ハーン自身の「のっぺらぼう」体験を加えた再話の面白みが読者を魅了し、ハワイへと運ばれるきっかけをつくったのかもしれない。

4. 井上円了との出会いと訣別

1世紀中国の『漢書』にはじめてあらわれた「妖怪」という言葉は、日本では8世紀末に成立した『続日本紀』の777（宝亀8）年3月19日に「辛未、大祓す。宮中に頻に妖怪有るが為なり」⁽⁹⁾として登場する。しかし一般には「モノ」「モノノケ」「オニ」などの言葉がおもに用いられ、明治時代に入り、仏教哲学者の井上円了の妖怪研究、とりわけ『妖怪学講義』等の著作を通して、はじめて「妖怪」という言葉が世間に浸透していったと考えられている。

円了は1887年にみづからが創設した哲学館（後の東洋大学）の資金調達のためもあり、生涯を通して全国巡回講演の活動を行った。ちょうどハーンが松江に住んでいた1891年5月、円了は松江で講演を行うことになった。当時の山陰新聞には次のような記事が掲載されている。

「ヘルン氏は円了井上文学士の来松せんことを聞き、^{べんぶじゃくやく}拊舞雀躍してその期遅しと待ち居

れるよし」⁽¹⁰⁾

「ヘルン」とはハーンのこと、島根県とハーンとの間に交わされた条約書にそう記されたことから、当時、島根県では一般的に「ヘルン」と表記されていた。円了の来松を待かねているハーンの様子が見てとれる。円了は5月30日にハーン宅を訪ねて懇談し、その後、松江城天守閣やハーンの勤務先である島根県尋常中学校へ同行している。翌日、ハーンは島根県尋常中学校で円了の講演も聴講している。

ところで、ハーンが書き残した円了の印象は次のような内容だった。「東洋の言語文化の大学設立のための講演で来松した。ハンサムで礼儀正しく上品な人物。すきのない洋服の着こなして、健康そうで年齢よりも若くみえる。愛国心により、外国勢による教育から日本を独立させたいと願っている」。⁽¹¹⁾ ここには、ハーンの最大の関心事だったと思われる円了の妖怪観については、少しも言及されていない。

そこで推察されるのは、ハーンと円了の妖怪観の相違点だ。円了は、妖怪（＝不思議）を「実怪」・「虚怪」に、さらに「実怪」を「真怪」・「仮怪」に、虚怪を「偽怪」・「誤怪」に分類し、妖怪を合理的説明により科学的解明へと導こうとした。子どもの頃からハーン同様に、ふしぎを非常に愛する人であったが、呪術に拘泥され続けてきた日本の伝統社会の思考を顧みたま、時勢も踏まえつつ、自然科学的な観点から批判的妖怪研究を試みたのだった。

柳田國男は円了の妖怪研究を批判的に受け止め、民俗学のもっとも大切な心意現象の探究に妖怪伝承の重要性を訴えた。ハーンもこの点では同様で、円了の妖怪観を受け入れることはできなかったようだ。それは、長男一雄の次のような述懐から知ることができる。

「いつも霊の味方であり、神秘を好み不思議を尊んだが故に、……井上円了先生のような幽霊打破論を残酷であり非芸術的だと申した父でありました。」⁽¹²⁾

“ghost”という言葉のをこよなく愛したハーンだった。晩年の東大講義「文学における超自然的なものの価値」では、この言葉の深淵な意味を語っている。その要旨を列举すると「想像以上に意味深長な言葉だ」「古代英語には『霊の』(spiritual) や『超自然的な』(supernatural) にあたる言葉がなかった。これらの言葉はラテン語起源だ」「今日、『神の』(divine) 『聖なる』(holy) 『奇跡的な』(miraculous) と称されるものは、古代アングロサクソン人にとっては“ghostly”の一語で十分説明される」などである。山陰地方の出色の紀行文でハーンの代表作のひとつである『知られぬ日本の面影』には、“ghost”が30回、“ghostly”が35回使用され、いずれもハーンが感嘆する美しさ、すばらしさを描写する箇所に使われているという。⁽¹³⁾ そこにはハーンの“ghost”への深い愛着の一端をうかがうことができる。

さらに学生たちに、「妖精、妖怪などの霊的存在が馬鹿げたものだと考えるのは、想像力に欠け潤いのない実利的な人」だという内容のことを伝えている。（「妖精文学」）これは、家族に語っていた円了の妖怪観の拒絶とも響き合う発言だ。

霊的想像力を尊んだハーンは、長男一雄を10歳まで小学校へあげず、アンデルセンやイギリスの民俗学者アンドルー・ラングの再話物語をテキストにしたホームスクーリングを行っていた。それは1890年10月26日に島根県私立教育会で行った講演「想像力の価値」で語ったように、知識だけを詰め込む日本の教育へ懸念をもっていたからだ。そのような行動にも、〈見えざるもの〉が人間の想像力を育むというハーンの認識を垣間見ることができる。

5. ハーンともうひとつの〈見えざるもの〉

ハーンが出会い、恐怖と不安を覚え、同時に人間のあり方を考える上で多くを学んだもうひとつの〈見えざるもの〉、それは感染症だ。少なくとも次の6つの記事や作品を残している。

- ① 「流行病の兆し」“Epidemic in Embryo”（1873年6月8日付、シンシナティ・エンクワイアラー紙）
- ② 「目に見えない毒」“Invisible Poisons”（1881年11月1日付、デイリー・シティ・アイテム紙）
- ③ 「黄熱病」“El Vómito”（1881年3月21日付、デイリー・シティ・アイテム紙）
- ④ 「天然痘」“La Vérette”（1888年10月、ハーバース・マンズリー誌、後に『仏領西インドの2年間』<1890年>に所収）
- ⑤ 「さようなら」“Sayōnara”（1894年、『知られぬ日本の面影』）
- ⑥ 「コレラ流行期」“In Cholera-Time”（1896年、『心』）

このうち、④～⑥については単行本に収録された作品である。④は、カリブ海のマルティニーク島滞在中（1888年）に体験した天然痘の流行に関する具さな観察記で、島の人々がゾンビとともに最も恐れた目に見えない相手の対処法と人々の行動が描かれている。防疫法としては、「村々では一晩中タールを焚く」「トウモロコシが3粒に、樟脳が少し入った天然痘除けのお守りを身につける」「死者に大量の石灰をかける」「食料を運ぶアメリカ船の寄港拒否」などだ。あいにく謝肉祭の時期と重なり、罹患者も仮面をかぶって踊りに加わり、感染爆発が起きてしまう。しかし、ハーンがそこに見た人間模様は、罹患者の家族が寝ずの看病をしたり、親の疫病死で残された子どもたちを引き取って育てる底なしのやさしさをもった女性たちの姿だった。

ハーンは幸い、天然痘の罹患は免れたが、マルティニーク滞在中に腸チフスと思われる疫病に罹患し、6週間も床につく。その際、必死に看病し、命を救ってくれたのは、頑なまでにゾンビ信仰を体内に宿した女中のシリリアだった。前述のように、シリリアはヴェドーアのゾンビ信仰の諸相を教示してくれる大切なインフォーマントでもあった。

日本では、松江と神戸でコレラの流行を体験する。松江では、熊本転任間際の1891年11月、コレラが流行し勤務先の1つ、島根県師範学校ではクラスターが発生した。校長は、沈没船の船長のように危険の只中に踏みとどまり、病気の生徒の看病と消毒作業の監督、事務職員も休ませてその業務も一人でこなしていると、その様子を記す。校内でクラスター

が発生しても、パニックを起こさず、礼儀正しく立ち振る舞う生徒や斎藤熊太郎校長の勇氣とやさしさ、学校と生徒の強い信頼の絆を評価している。⁽¹⁴⁾

すなわち、ハーンが感染症流行時に見出したものは、罹患者をバッシングするような人間の姿ではなく、非常事態にあって底抜けの勇氣とやさしさを発揮できる人間の可能性だったと言える。また、ハーン自身もフロリダでのマラリア（34歳）、マルティニークでの腸チフス（37歳）という2度の感染症罹患から生還する体験を経て、手洗いと嗽という基本的な感染症予防策を身につけていたことは、2020年に、小泉八雲記念館に寄贈された資料からわかる。それは、ハーンが松江で滞在した最初の宿、富田旅館の主人・女将の口述筆記である。

「衛生ニハ余程心ヲ留メテ居ラレマシテ 外出シテ帰ラレタ時又ハ筆（ペン）ヲ把テ仕事ヲサレタ後ナド 必ラズ手ヲ洗ヒウガヒヲセスト気ガスマヌ 私方デモ二階ニ洗手場を新タニ造ツテ水甕ヲ備付ケマシタガ 此小水甕ハ八雲記念館に出シテ置キマシタ」⁽¹⁵⁾

ハーンが帰宅時と執筆の後には、必ず手洗いと嗽をするので、寝室のある二階に手洗い場をつくり、手水鉢を用意してくれたという。

またハーンは離松に際して、生徒の見送りを禁止することを通達した。これは罹患者の排せつ物投棄で乗船場のある大橋川が汚染されていると考えたからだ。しかし、結果的には200名の生徒に見送られ、複雑な思いを秘めて熊本へ旅立ったのだった。

神戸時代に日清戦争の凱旋兵によってもたらされたコレラ流行の体験では、「見ていると、ずいぶん残酷なようだが、しかし衛生法なんてものは、これはよろしく残酷なものではない」⁽¹⁶⁾とも言っている。

妖怪とともに、感染症からも人間の生死、人間の行動のあり方について、多くを学んだ作家だったことがわかる。

6. まとめ：ハーンがみた〈見えざるもの〉

ハーンの妻セツは「思い出の記」の中で、「怪談は大層好きでありまして、『怪談の書物は私の宝物』とっていました」⁽¹⁷⁾と回想する。ハーンは東大の講義の中で、超自然の文学には一面の真理があり、その真理に対する未来の人々の関心は不変だと述べている。（「小説における超自然的なものの価値」）「一面の真理」とは、時空を超えて変わらない大切なことで、超自然の世界が人間に問いかけるメッセージのようなものだろう。友人で先輩ジャパノロジストであるチェンバレンに宛てた手紙には「人生に生きる目的を与えてくれたのはゴースト」で、「ゴーストは人間に自然への畏怖を教えた」⁽¹⁸⁾（1893年12月14日付）と書かれている。

現にハーンの怪談作品は、ここ数年だけでも、あらたにアイルランド語、ルーマニア語、カタロニア語（スペイン・バルセロナ地方の地域言語）に翻訳されており、それ以前には



松江ゴーストツアー（月照寺）
提供 NPO 法人松江ツーリズム研究会

世界の主要言語に加え、イヌイット語に翻訳された経緯もある。夜の松江で八雲の怪談ゆかりの地を探访する「松江ゴーストツアー」も2008年のスタート以来、五千人以上が参加する盛況が続いており、コロナ禍の2021年も島根県内居住者に限って参加を受け入れているが、いずれの回も堅調な集客率である。すなわち、ハーンが帝国大学の学生たちに、未来の人々も怪談の真理に関心を寄せるだろうと語った预言

は、的中していると言えるかもしれない。

ハーンは1894年の熊本での講演「極東の将来」で、「自然は過ちを犯さない。生き残る最適者は自然と最高に共存できて、わずかなものに満足できる者である。宇宙の法則とはこのようなものである」⁽¹⁹⁾と聴衆に語りかけた。ハーンの怪談観の根底には、自然への畏怖の念を抱いて生きるべきだという思考がある。

生涯、ゴーストを心の糧に生きたハーンは、〈見えざるもの〉を畏怖する謙虚な心が、人間中心主義への反省を促し、そこからの脱却を可能にすると考えていたのだと思われる。

[注]

- (1) Murray, P., *A Fantastic Journey, The Life and Literature of Lafcadio Hearn*, p.47, Japan Library, 1993. この書簡は十枚に及ぶ長文であるが、引用文はその文末に記されている。
- (2) 『ラフカディオ・ハーン著作集』第一巻、66頁、恒文社、1980年。
- (3) Hearn, "Ma Bonne," *Two Years in the French West Indies*, 1890. 引用は平井呈一訳「わが家の女中」（『仏領西インドの二年間』下、84頁、恒文社、1976年）によった。
- (4) 小泉一雄『父小泉八雲』117-118頁、小山書店、1950年。
- (5) 大島廣志「『雪女』伝承論」『國學院雑誌』第99巻11号、1998年。
- (6) 1891年8月27日付、チェンバレン宛書簡。『ラフカディオ・ハーン著作集』第14巻、444頁、恒文社、1983年。
- (7) Hearn, "From Hōki to Oki," *Glimpses of Unfamiliar Japan* vol. 2, 1894. 引用は、小泉八雲著、平井呈一訳「伯耆から隠岐へ」（『日本瞥見記』下、336頁、恒文社、1975年）によった。
- (8) グレン・グラント著、藤野治美・河西理恵子訳『ハワイ妖怪ツアー』11-17頁、大栄出版、1995年。
- (9) 『続日本紀』五（新日本古典文学大系16）、32-33頁、1998年、岩波書店。
- (10) 1891（明治24）年5月27日付、山陰新聞。島根県立図書館所蔵のマイクロフィルムによる。
- (11) 1891年6月23日付「島根九州だより」（『ラフカディオ・ハーン著作集』第15巻、490-494頁、恒文社、1988年）より抜粋、引用。
- (12) 小泉一雄「父と科学」『科学知識』第18巻第12号、科学知識普及会、1938年。
- (13) 松浦雄二「『知られぬ日本の面影』における『まぼろし系』の言葉」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』vol.52、2014年。
- (14) Hearn, "Sayōnara," *Glimpses of Unfamiliar Japan* vol. 2, pp. 689-690. Houghton, Mifflin and Company, 1894.
- (15) 富田太平・妻ツネ誌「富田旅館ニ於ケル小泉八雲先生」。その全文が、『松江文化情報誌 湖都松江』第37

号（松江市文化協会、2019 年）に翻刻、掲載されている。

(16) Hearn, "In Cholera-Time", *Kokoro*, 1896. 引用は、小泉八雲著、平井呈一訳「コレラ流行期に」（『東の国から・心』、595 頁、恒文社、1975 年）によった。

(17) 小泉節子「思い出の記」『小泉八雲—思い出の記・父「八雲」を憶う』21 頁、恒文社、1976 年。

(18) *Japanese Letters*, edited by Elizabeth Bisland, *The Writings of Lafcadio Hearn* vol. 16, p. 84, Houghton Mifflin Company, 1922.

(19) 中島最吉訳「極東の将来」『ラフカディオ・ハーン再考—百年後の熊本から』296 頁、恒文社、1993 年。

参考文献

- ・ 小泉凡「ラフカディオ・ハーンにおける口承文化の受容と継承」『ケルト口承文化の水脈』（中央大学人文科学研究所編、中央大学出版部発行）、2006 年。
- ・ 小泉凡「ハーンのホームスクーリング」『教育者ラフカディオ・ハーンの世界—小泉八雲の西田千太郎宛書簡を中心に—』（島根大学附属図書館小泉八雲出版編集委員会編、ワンライン発行）2006 年。
- ・ 小泉凡「文化資源として生かす小泉八雲—^{ラフカディオ・ハーン}松江における 3 つの実践から」『文化資源學』第 11 号、文化資源学会、2013 年。
- ・ 小泉凡「小泉八雲にみる説話伝承と再話怪談」『昔話—研究と資料—』第 46 号、日本昔話学会、2018 年。
- ・ 小泉凡「小泉八雲、妖怪へのまなざし—新宿と松江をつなぐもの—」『小泉八雲—放浪するゴースト』公益財団法人新宿未来創造財団、新宿区立新宿歴史博物館、2020 年。
- ・ 小松和彦『妖怪文化入門』せりか書房、2006 年。
- ・ 香川雅信『江戸の妖怪革命』角川ソフィア文庫、2013 年。
- ・ 那須野純子「ハーンのイギリス時代—追想と再考—」『八雲』第 28 号、小泉八雲顕彰会、2016 年。